

近世中國に於ける居士佛教に就いて

(彭際清を中心として)

荻 須 純 道

「渡法子、就做和尚」といふ言葉は近世に於ける中國佛教界の一面をよく物語つてゐる。生活に行き詰れる者が僧侶となり、僧院生活を營むといふことは、何んとしてもそこには清新なものを見ることが出来ない。出家の動機に於て最も貴ぶべきものは道心である。然るに、道心なくして生活のみを目的とする衣食の佛教となりては輝かしき教化の實も擧げられず、法燈のゆらぐも亦當然のこと、いはねばならない。それ故に古徳が「法輪轉ず」と常に誠められたのも宜なることである。

さて明代に於ける佛教々團を翻つて見る時、太祖を始め歴代皇帝の外護は頗る手厚きものがあつた。かつて太祖（朱元璋）は僧たりし因縁もあり、ために教界は、その恩寵外護を蒙ること著しきものがあつた。太祖の佛教に對する態度が餘りにも熱心なりしたため、太祖は佛教に感蕩したとさへ後人の罵りを受けた程である。續いて太宗武宗何れも崇佛者であり、佛菩薩を信奉する著述をなしたり、又僧尼を優遇した。僧尼の優遇はここにその數を著しく激増せしめ、憲宗の當時度僧の數は五十餘萬といはれ、その大部分は賦役を免れるためであり、また生活に堪へざる人生の落伍者であつた。従つ

て僧侶の素質低下は當然であり、教團の權威は地に墜ちたといはねばならない。

これがため僧團の統制には歷朝頗る頭を悩まし、入道する年齢に制限を加へたり、試験を行つたり、或は又妻妾あるものや經典に通ぜざるものは還俗せしめた。かくて僧となるためにはかゝる制限が行はれ、度牒極めて嚴重であつた。然しそれにもかゝはらず一方に於ては又賣牒が行はれた。この賣牒による収入は國費に當てられたとしても、賣牒による僧侶の素質低下は言を俟たざるところであり、教團の紊亂はその止まるところを知らない。寺院は俗臭紛々たる社交場と化し、のみならず彌勒教匪や白蓮教匪が寺院を根據として、宗教を利用し亂を企つる等の弊害を醸した。

かゝる佛教々團の實狀に於ては、勝れたる高德學匠その跡を絶つに至り、明末出でたる雲棲株宏、藕益智旭等の後には輝かしき教界の明星は出でず、劃期的な佛教哲理を提唱する學徳がなかつた。然しながら明末には多くの在俗佛教徒即ち居士が多く輩出した。やがてこれは清朝に於ける「居士佛教」の端を開いたもので、その信奉するところは僧俗ともに禪と念佛であつた。

二

清代に於ける佛教は世祖順治帝、聖祖康熙帝、世宗雍正帝、高宗乾隆帝の時代に最も華かであつたといへる。それは國運の隆盛とこれ等歷朝の崇佛によるものであり、殊に大藏經の出版は清代佛教の一大偉觀であつた。康熙帝の時代には明の萬歷版に次いで續藏經が印刻され、雍正十三年（一七三五）より乾隆三年（一七三八）に至る四ヶ年出版された「龍藏」と稱せられる勅版大藏經や乾隆帝の事業である「滿洲語譯大藏經」等があり大いに光輝を放つてゐる。然しながら佛教衰滅の潮流は如何とも致し難く、教團の中に傑出せる學徳もなく、教學上には何らの進展を見なかつた。たとへ諸寺諸山に

多數の僧侶が居住したとしても、それは必ずしも佛教の盛隆を意味するものではない。かゝる事情のもとによく佛教の眞精神を護持し得たものは居士である。

居士の多くは儒者であつた。佛教の學識を持つた知識人が佛教の研究に従つたのである。儒佛一致の融合に於て佛教精神を宣揚せんとした。儒教哲學と佛教哲學との調和は居士佛教徒の根本原理であり、この信念より居士佛教徒の活動が展開されたといつてよい。

かつて宋代に契嵩（一〇七二寂）は儒家の佛教排撃に拮抗して輔教編（原教、勸書、廣原教、孝論、堽經贊）を撰し、儒家に對する啓蒙運動を展開し、儒佛一貫の理を力説した。「性理」といひ「佛性」といひその根本義に於ては儒釋ともに同じであるとなし、又佛教で説く五戒は儒教の五常に相當するといつてゐる。即ち不殺は仁であり、不盜は義であり、不邪淫は禮であり、不飲酒は智であり、不妄言は信であると喝破した。契嵩の眞摯なる儒佛調和の大文字は儒家の蒙を啓きて省みさせ、當時の宰相韓琦や排佛の急先鋒歐陽修を歸佛せしめ、また王安石、張商英の如きもこの書によりて佛教歸仰の縁を結んだといはれる。契嵩の儒佛調和は當時の知識人に相當強く影響を及したものと思はれる。

清代の居士佛教徒が宋儒の思想的流れを汲んでゐるであらうことはいふまでもない。宋儒の唱ふる儒教哲學は禪學を媒介として理を窮め、大成されたもので、所謂宋學といひ、佛教理論が脱胎換骨され儒佛二教が調和されたものともいへる。宋學の開拓者周濂溪（名は敦頤、字は茂叔）は禪家との交渉があり、鶴林壽涯、黃龍慧南、晦堂祖心、佛印了元、東林常總等の五師に請益參究したといはれ、契嵩とも同時代の人である。後宋學を大成した朱子は儒家の純正な立場より佛教を攻撃したが、遇々科擧に應ぜんとした時、大慧語錄一冊のみを持つてゐたといふから、私かに禪に心を用ひてゐたことは事實であらう。更に陸象山が「宇宙は便ち是れ吾が心、吾が心は即ち是れ宇宙なり。東海に聖人ありて出ず、此の心

同じなり。此の理同じなり。西海に聖人ありて出ず、此の心同じなり。南海北海聖人ありて出ず、此の心同じなり。此の理同じなり。千百世の上、聖人ありて出ず、此の心同じなり、此の理同じなり。千百世の下、聖人ありて出ず、此心同じなり、此の理同じなり。」といつた詞は陸子が古書を読み宇宙の二字に至り大省した感慨であつた。陸子は後「心即理」を提唱したが固り禪家の本心本性と類を同じくするものであり、この陸子の思想學風を承け續ぎ大成したのが明代の大儒王陽明であることは周知の如くである。正法護持の精神に燃えた清代の居士は儒教を究めた知識人であり、これ等先哲の流を汲む人々であつた。儒佛一致の調和に於て佛教精神を宣揚せんとした儒學者であつた。

三

清代居士佛教徒の中でも彭紹升、楊文會は代表的人物である。彭紹升（一七四〇—一七九六）は字は尺木、號は際清といひ、又自ら知歸子と號した。彼は乾隆時代に活動した人で陽明學を究むるとともに、深く佛教學の研鑽をなし、宋元儒者の佛教攻撃の蒙を啓き、儒佛の調和を計り、居士佛教興起の指導原理を與ふとともに、又儒佛道三教調和の主張者でもあつた。彼が佛教精神顯揚のため心血を注いだ著述には、一乘決疑論、華嚴念佛三昧論、無量壽經起信論等がある。

彼はその著「一乘決疑論」の冒頭に

予初習儒書。執泥文字。效昌黎韓氏語。妄著論排佛。然實未知佛之爲佛。果何如者也。已而究生死之說。瞿然有省。始知回向心地。

とて、最初儒學を學びたる頃、唐代に排佛論を唱へた昌黎韓氏即ち韓退之に共鳴し、排佛を論じたのであるが、然し未だ佛の佛たる所以も知らず、只徒らに排佛論を唱へてゐるに過ぎなかつた。然るに佛の教ゆる生死の問題を究めたるとき、

瞿然深く省みるところがあつたといふ。只儒家といふ立場より徒らに排佛をこゝしてゐた自己の誤謬を悟り、翻然として向き直り、儒家の蒙を啓かんとしたといふ。

彼はいふ、宋明以來の諸先輩が論ずる書を學ぶことにより、稍々孔顏學派の思想精神を知ることが出來た。殊に程明道、陸象山、王陽明、高梁谿の四先生に欽仰するところが多い。而もこれ等諸家の深旨は佛家の證するところであり、佛の教に契合するところであるにも拘らず、往々にして儒家は排佛をこゝしてゐる。四家の中でも王陽明のみは排佛的態度をとらなかつたが、他は佛教思想を採り入れ、共鳴しながら而も時としては排佛的傾向を免れないと。かくて彼は儒佛の論争已むことなきを憂え、諸儒の惑を解かんとして一乗決疑論を著論した。

彼がいふ二三の問題を紹介するならば、先づ「生死の問題」に關し儒家の見解を如何に批判したかといふに

程子曰。佛學只是以生死恐動人。聖賢以生死爲本分事。無可懼。故不論生死。知歸子曰。朝聞道。夕死可矣。然則未聞道而死。其可不謂之虛生乎。夫虛生者。聖人之所甚懼也。是故。學易而假年。發憤而忘老。其爲性命之憂。豈不大哉。佛言生死事大。正欲策人聞道耳。何嘗怖死哉。故曰不生不滅。名一往來而實無往來。只作尋常本分事說也。

程子のいふところによると佛學は生死を恐れ人を動かしこの問題を強調してゐるのであるが、聖賢の教に於ては生死は本分の事であるがため、別に恐るべきものでもなく、従つて生死といふ如きことは論じない。これに對して彼は程子の言の當らざるを指摘し、佛教にて生死事大とて生死の問題を強調する所以は人を策勵して道を聞かしめんがためであり、死を恐れていふのではない。宗教的安心を得ずして死ぬことを恐るのである。朝に道を聞かば夕に死すとも可なりとは聖賢の教であるが、もしも道を聞かずして死するなら、それは虛生といふべきで、虛生は聖賢の最も恐れたことである。佛教が生死を強調する所以も亦こゝにある。元來生もなく死もなく、不生不滅と佛教にてはいふてゐる。

又程子が佛教の殺生を戒むの説を論じ、君子には「不忍の心」あり殺生を行はない。程子の先兄が嘗て一蝎を見たところ、殺すに忍びず放去した。そして頌中の二句に「殺之則傷仁。放之則害義」とあつたといふ。彭際清はこの語に對して、生かすを以て仁となし、殺すを以て義となすは大いに不可である。蝎には殺すべき罪がない。もしもこれを殺したならば仁を傷つけるのみでなく、義をも害ふものである。戒殺の一事は儒佛共由の路であり、佛家が生を好み、儒家が殺を好むといふ如きものではない。若しも生を以て仁となし、殺を以て義となすならば、義は乃ち仁の賊となるといつてる。

又朱子が

釋氏只四十二章是古書。餘皆中國文士潤色成之。維摩經亦南北時人作。又曰。達摩未來中國時。如遠肇法師之徒。只是說老莊。後來人亦多以老莊助禪。西域豈有韻。諸祖相傳傷。平仄協韻。皆是後人爲之。又曰。圓覺經只有三段好。

後面只是強添。楞伽經本只是呪語。後來房融添入許多道理說話。呪語想亦淺近。但其徒恐譯出則人易之。故不譯。又曰。佛只是說大話謾人。法華經開口便恒河沙幾萬劫幾千劫。更無近的年代。

として經典は中國の文士が潤色して出來たものであり、達摩が未だ中國に渡來しない以前には、慧遠や僧肇等の法師が老莊を説き、又後世も老莊の思想を以て禪を助成してゐる。呪語は譯出せず、大話を説きて人を謾つてゐる。この朱子の論に對し、彭際清は次の如くいつた。經典を翻譯した法師は華梵兼通の人であるから、老莊的言語を以て、佛教の旨を演暢したであらう。又呪は密語であるがため、その音を取りて、義を取らないのである。佛教の旨と老莊の教とは自ら別で、老莊の書と圓覺、楞嚴の諸經とを子細に較ぶれば同異を見ることが出來、分劑畫然としてゐると辨じた。

彭際清は先にも述べた如く、陽明學を究めた儒家であるが、後禪に歸し深山に住して向上の第一義に參究したといふ。

その論するところ精心密意、紀律森然として談禪佛學を主とするところが多かつたため、純正な立場を以てする儒學者からの非難を免れなかつた。宋明の儒家は佛教原理を以て儒學を解せんとしたが、彼は儒學を佛教に融合せんとしたところに非難があつた。然し彼は己が所信を枉げなかつた。乃ち曰く

或問知歸子曰子儒者也。服習諸先生書舊矣。今舍而之佛。其不爲背本乎。答曰。予所言者。天下之公言也。非己之所得私也。佛法行世久矣。是苦海之津梁也。是衆生之眼目也。是帝天之所呵護。神鬼之所欽崇也。六師不能沮其化。三武不能遏其流。而諸先生願欲以方隅之見辭而闢之。亦勞而少功矣。闢之者。一以爲僞教。一以爲異端。是法執未忘也。以爲僞教。是天眼未通也。諸先生之在今日。決定法執忘。天眼通矣。是予之所言。皆諸先生所欲言也。又何問焉。云云。^①

と。佛法は人生苦海の津梁であり、衆生の眼目であれば帝天も護し神鬼も崇め、六師外道も轉法輪を沮止することが出来ず、又中國に屢々起つた法難三武一宗の彈壓の如きも滔々として流れ行く佛法を防遏することが出来なかつた。もしも佛教を僞教となし、佛を信することを異端となすならば、法執未だ忘ぜざるものであり、天眼未だ通ぜざるものである。諸先生にして今日在らしめば、必ずや法執忘じ、天眼通じて、予のいふところを諸先生もいはんとされるであらうと、自信を以ていふてゐる。

四

かくて彭際清は儒佛の融合を計かり、佛教精神の顯揚に力めた。彼は明末以來、法燈その輝きを失ひ、衰微の一途を辿り行く佛教をして復び光輝を増さしむべく、正法顯揚の論陣を張つたのである。

佛教衰微の原因を考察するならば、僧侶の多くが無氣力であり、道心なく、生活のために寺院生活を営む者であつたといふことは先に述べたところであるが、思想的には先づ第一には不立文字の餘弊であつた。宋代以後、中國佛教界は禪によつて塗りつぶされた。教外別傳、不立文字はその眞意を離れて曲解すれば、文字を不要とし、學問より遠ざかることである。而もこの事實が年とともに強くなり、僧侶は「山の佛教」として社會より遊離し、佛教は遂ひに思想界より遠ざかるに至つた。第二には南宋以後、佛教を排撃した儒教が盛んになつたことである。儒學の純正を堅持せんがため、佛教を排撃して成立した朱子學が盛んとなれば佛教に不利であるといふまでもない。僧侶は文筆なきためこれに拮抗して思想界を牛耳ることが出来なかつた。第三には明代以後、民族信仰ともいふべき道教が著しく勃興したことである。

これ等佛教衰滅の原因により、教界は法燈の輝きを失つたが、彭際清等の居士佛教徒の出現により、再びその光輝は回復された。先にもいふ如く、彼等の多くは儒學者であつた。思想界を牛耳つた儒學者が儒佛調和の理論を與へ、沈淪せる佛教の興隆を計り、佛教精神の顯揚に意を注いだところに、清代「居士佛教」の特色がある。寶珠を護りながら山に隱遁して時代から遠ざかり、社會から遊離して、遂ひには思想界よりオミットされた「山の佛教」即ち僧侶の佛教を、在俗の居士が思想界に投じて、時代に、社會に生かさんとしたところに「在家佛教」といはるゝ所以がある。

彭際清は乾隆時代の人であつた。康熙、乾隆の頃は朝廷の佛教保護により、教會史的には清代佛教の華かな時代であるが、清朝の中葉以後、佛教は甚だしく不振を極めた。更に長髮賊洪秀全の反亂はキリスト教を信條とする宗教一揆であるだけに、佛教の被害は夥しいものがあつた。咸豐元年（一八五二）より同治三年（一八六四）に至る反亂により、寺觀、祖廟は破棄され、佛像經卷また燒棄されて、衰運の佛教々團はこゝに致命的打撃を受けた。

この廢滅せる清代佛教の復興に全力を注いだのは楊文會即ち楊仁山居士（一八三七—一九一）であつた。居士は佛教の弘

通、研究には經典の流通にありとなし、「金陵刻經處」を設立して佛書刊行の事業を南京に創めたが、長髮賊の反亂に禍され底本とする佛書の入手も困難にて、遠く日本、朝鮮にまで求めて、その事業に全力を盡した。彼が遇へ歐洲にて吾が南條文雄博士と相識り、日本より佛書の輸入を約したことなど人のよく知るところである。かくて出版せる佛書の數二千數餘卷であり、又佛學研究會の會長として講經をなし、佛敎の研究弘通に心血を注いだ。

彼の卒したのは宣統三年（一九一）であり（七十五歳、吾が明治四十四年のことであるが、この年辛亥の革命起り、清朝の社稷はこゝに倒潰し、翌年中華民國が成立した。然しこの辛亥の革命は中國諸方面に深刻な衝動を與へたが、佛敎界にも亦壓迫が加へられた。寺産は沒收され、寺廟は軍隊に占據され、或は學校官衙となつた。こゝに於て僧俗の覺醒が促され、天童山敬安（一八五一—一九一三）等の新佛敎運動なり、上海に中國佛敎總會が組織され、佛敎改新の氣勢が擧げられた。これ等僧俗の新運動は學院の建設、學會の結成、圖書の刊行、濟世事業となり、やがて太虚法師の武昌に佛學院を開くあり、上海には世界佛敎居士林の設立さるあり、中國佛敎は俄然こゝに僧俗の覺醒により、活氣を呈するに至り、かくて現代に及んだ。

明末以來、沈滞せる佛敎界に、活を入れ、光輝あらしめたのは清代に出でた居士佛敎徒であつた。「山の佛敎」として社會より遊離し、思想界より遠かつた佛敎を思想界に生かしたのは彭際清であつた。後佛敎復興の實踐運動をなした楊文會や辛亥革命を契機として起つた僧俗の覺醒による新佛敎運動は敎界に活氣を呈したものであるが、それより先、沈滞不振の近世中國佛敎の回復に理論的根據を與へて護法運動を展開した居士彭際清の活動によるところ多きことを牢記して擧筆する。

註① 大日本續藏經第九套第一册所收一乘決疑論。

② 同上。

③ 同上。